



東アジアの玦飾の起源と拡散

鄧 聰 香港中文大学中国考古芸術研究センター教授

1、はじめに

最近の考古学の新発見によれば、東アジア地域の玦飾の起源はおそらく一元的であろう(注1)。現在、東アジアで最も早い玦飾は中国東北の遼西一帯で見られるが、おそらくこれまでに知られている世界で最も早い耳飾りではないかと考えられる。今から約8000年余りに興隆窪文化を代表する玦飾が現れ、その後東アジアの大陸及び島々のほとんどの地域へ浸透していった。玦飾の拡散は東アジアの大陸及び島々に様々な伝播方式を呈した。近代に到るまで、フィリピン及びインドネシアの島々では今なお玦飾を身に付ける先住民の風習が見られ、玦飾は東アジアでは少なくとも8000年以上の悠久の歴史がある。小稿は不十分ながら、以下において玦飾の中国東北での起源及び東アジアの轆轤と非轆轤の玦飾両体系について簡単に検討し、ご教示を乞うものである。

2、玦飾の中国東北起源仮説

現今の考古学の発見によれば、東アジア地域で最も古い玦飾は西遼河流域に出現し、徐々に四方へ広がっていった。一般的には中国の東北地方から離れた地域ほど玦飾の年代は遅くなる。西遼河流域を中心として考えるなら、北方の黒竜江一帯で既に知られている玦飾の出現年代は今から7500年から7000年前の間である。ロシア沿岸一帯でもおそらく7000年ほど前には玦飾が出現していたと推測できる。北緯60度のYakutでは5000年から4000年前の玦飾が見つかっており、現在知られている玦飾の北限を成す。華北及び山東の丘陵一帯における早期玦飾の出現状況はまだ明らかになっていない。長江中下流域では7000年から6000年前に玦飾は既に現れている。嶺南地域では4500年前以降になってやっと玦飾が現れる。ベトナムのソンコイ河三角洲及び北部沿岸では4000年前以降に玦飾が相次いで現れている。ベトナム南部の玦飾は遅れて3000年前である。約7000年前以降には玦飾は既に東アジア北部の島々、日本列島の本州及び九州に分布していた。一方、台湾やフィリピン諸島のような南方の諸島では、玦飾の年代の上限は4000年前である。

以上各地の玦飾の年代を総合して見ると、中国の東北を軸の中心として四方へ放射状に広がっている。中国自体からいえば、玦飾の拡散は総じて東部沿岸地域から南北に進んでいる。華南方面では、長江及び珠江の流域で玦飾が東から西へと伝播した形跡がある。しかし玦飾はチベット、甘肅西部及び新疆などを越えて西に伝わることはついに出来なかった。

今から8000～7000年前の玦飾は主に中国東北地域に分布している。興隆窪文化はこれまでに知られている東アジア地域最古の玦飾の体系である(注2)。この文化の分布は西遼河、大凌河流域を主として、北は吉林省西南縁辺、南は燕山南麓一帯に及び、代表的な遺跡群は内蒙古敖漢旗興隆窪(注3)、林西県白音長汗(注4)、巴林右旗錫本包楞(注5)、

遼寧省阜新県査海（注6）などである。玉器の種類は主に玦、匕形器、弯条形器、管、斧、鏃、鏦などである。その内、玦と匕形器が大変特徴的である。玦は耳飾りとして用いたものである。先頃中国社会科学院考古研究所の劉国祥氏が、赤峰興隆溝遺跡での発掘中に、女性の頭骨の右の眼孔内に1点の玦を発見し、「以玉代目」説を唱え、注目されている（注7）。もしこれが事実なら、玦飾の機能面における最も早い分化である。また、匕形器は一般に首飾り、胸飾り、綴り飾りなどに用いられたと見られている。玉管と弯条形器は首あるいは胸の装飾品である。現在、興隆窪文化中期（8000～7000年前）からは既に各種の玉器が出土していることが知られている。興隆窪文化の玦飾はかなり精巧で美しく作られており、環状と柱状の2種類に分けられ、玦飾が出現した最も早い時期からかなり長い発展の過程を経ているものと思われる。私が知るかぎりでは世界の考古学上では旧石器時代後期には耳飾りは見られないようである。興隆窪の玦飾の源についての謎への解答は新しい考古的発見を待たねばならない。東アジアで最も早い玦飾はおそらく全新世初期にロシア沿海州から中国東北一帯に出現したと考えられよう。

東北の黒竜江省で出土した玉器は過去には紅山文化の影響を受けたものであるとされていた。近年の劉国祥氏の研究によれば、黒竜江省の玉器の年代は今から7500～7000年前まで遡ると指摘されている。その内、1991年に小南山遺跡で発見されたM1及びグリッドT2(2)出土の遺物は、新開流下層遺跡の遺物と類似が多く、いずれも新開流文化に属するとされた（注8）。M1出土の玉器は全部で67件、その内玉環は45件、玉玦は11件、その他に匕形器、珠、斧などがある（注9）。従って、7500～7000年前には玦飾と匕形器などの玉器は中国の東北地域に広く分布していたと思われる。しかし、興隆窪遺跡と小南山遺跡の双方の玦飾の形と構造の差異があると認められる。小南山遺跡の玦飾のM1:21、1、2はそれぞれ直径が10、9.4、9.6cm、厚さが0.5～0.4cmで、大きくて薄いタイプである。また小南山遺跡出土の玉環は興隆窪文化及びそれに続く趙宝溝文化には全く見られないことに注意しなければならない。故に小南山遺跡の玉器群の年代及び組み合わせ関係は、さらにもう一步科学的に検証する必要があると考えられる。

今から7000～6000年前には、玦飾体系は北方は既にロシア沿海州まで広がっており、中国東南部の長江中、下流一帯では少なからぬ地点で玦飾が出土している。この時期の東北地方の趙宝溝文化中にも玦飾がある。また、日本列島でもこの段階において最も早期の玦飾が発見されている。

1983年にロシアの考古学者が沿海州のChertovy Vorota洞穴で新石器時代早期の玦飾を発見したが、共伴遺物には打製石鏃、石刃鏃、搔器、矢柄研磨器、石斧、骨槍などがある。また圧印菱格紋、篋紋を特色とする陶器群も出土している（注10）。この遺跡から出土した玉器に関しては、最近、川崎保氏が匕形器、弯条形器、玦飾、管玉などが出土品に含まれていると発表した（注11）。遺跡の住居面から出土した木炭の¹⁴C年代測定によれば4855±45BC、4605±45BCである。また、最近ロシアのKuzentsovがChertovy Vorota洞穴内にはルドナヤ文化及びその他の新石器文化、青銅器時代文化の3種の異な

った時代の堆積が包含されているであろうと指摘されている（注12）。従って、Chertovy Vorota 出土玉器の組み合わせ及び時代に関しては、今一步の検証が必要であろう。

中国の東南部においては、最近出版された河姆渡遺跡の報告書によれば（注13）、第四層から玦、璜、管玉、珠、墜などの玉石の装飾品が出土した。その内、玦飾は全部で6点で、いずれも文化層の中から出土し、¹⁴C年代測定によれば今から約7000年前であり、長江流域で最も早い玦飾であろう。河姆渡遺跡第四層の玦飾はやや小さく、直径は1.7～3.3cmの間である（注14）。筆者は2003年9月に浙江省文物考古研究所で通し番号T1④86と77YMT234(4B):301の2点の玦飾を詳細に観察したが、2点とも玦飾の切り目部分が完全には切断されていなかった。このような切り目部分が完全には切断されていない玦飾は凌家灘87M8:16においても見られる（注15）。河姆渡遺跡第四層中の6点の玦飾の内、2点は切り目部分が完全には切断されていないことから考えると、切り目部分が完全には切断されていない玦飾はデザインされたものであり、おそらく玦飾を墜飾に転化したことの表れであり、既に耳飾りの機能はなくなっていたと推測する。この時期における玦飾の機能の転化は、他にも例を見ることができる。1992年余杭県良渚梅園里第6号墓出土の2対の玦飾は、直径が3.3～7.8cmの範囲で、小さい方の2点の玦飾は頭部の両側から出土しており、大きい方の2点の玦飾は両手首の部分にあった。発掘者は、大きい玦飾は手首に付けた鐲で使われたと考えた（注16）。従って今から7000～6000年前には長江下流域で玦を耳飾りとする機能の上に既に様々な変化が現れ、墜や鐲として用いられたのでありと指摘しておく。

また、注目すべきは近年浙江省象山区塔山遺跡の土壙墓の発見である。男女成人の頭側から玦飾が各1点ずつ出土しており、河姆渡文化第3期に属し、年代は今から6000年前で、河姆渡文化の土壙墓で初めて確認された玦飾の出土例である（注17）。

長江下流の早期の玦飾は東から西へと推移しながら浸透していった。江蘇省、安徽省地域では、相次いで7000～6000年前の玦飾などの玉器が発見された。過去によく知られている馬家浜文化時代の圩墩遺跡と草鞋山遺跡の玦飾以外（注18）、江蘇省江陰市祁頭山遺跡で最近出土した馬家浜文化の玉器には、璜4点、玦11点、佩飾1点がある。発掘者の陸建芳氏は祁頭山遺跡の玦飾を、環形、管形、貝形、腰鼓形、台形などの数種類に分類している。祁頭山遺跡の土壙墓の年代はおそらく馬家浜文化のやや早いある一時期で、その中の浅い浮き彫り紋様の巻き足付き陶製高坏は湖南省湯家崗遺跡の白陶と対比することができる（注19）。また、余り注目されていないのは、丁沙地遺跡88T1で発見された棒状墜飾で、長さは7.2cm、幅1.2cmである（注20）。さらに、安徽省の黄陂嘴遺跡では、玦飾、璜、璧形墜などが発見され（注21）、その中に3点の玦飾が含まれており、直径は2.8～3.1cmの間で、やや小さい。

長江中流域については、湖南省の考古学者何介鈞氏が長溪文化前期にやっと玉器が出現したと論述している。即ち今から6500～5500年前である。長溪文化第1期の玉器は澧県丁家崗遺跡のM26で発見され、2点の璜が出土した。澧县城頭山遺跡の古城趾内で、大

溪文化第2期の土壙と包含層から璜と玦が各2点出土した。M680から出土した1点の玦は直径が2.5cmで、耳の辺りにあった。もう1点の玦はT3076の文化層から出たもので、直径は5.4cmである。上述の城頭山遺跡で発見されたものは、現在のところ長江中流域の最も早い玦飾であり、年代は今から6000年前である。何介鈞氏は長江中流の地域では玉材が乏しいので、この地域での大溪文化早期の璜と玦飾はおそらく長江下流から直接運ばれてきた“舶来品”であろうと考えている（注22）。

東アジアの列島では、日本の玦飾が時代的に最も早く出現し、おおよそ縄文時代早期末葉から中期初頭にあたる頃に盛んであった。一部の研究者たちは¹⁴Cの測定並びに年輪による補正を行って、日本の玦飾の流行した年代はだいたい今から6300～4900年の間であるとしている。最近の報告によれば、京都府舞鶴市浦入遺跡第4層から玦飾が出土し、その層の堆積の中にアカホヤ火山灰（約6500年前）が含まれているとのことである。また滋賀県守山市赤野井湾遺跡縄文早期末葉文化層からも玦飾が出土し、その上層はアカホヤ火山灰に覆われていた。また近年福井県桑野遺跡でやや大量に玦飾が出土し、隣接する地域の対応する層位で得られた¹⁴C年代は6690±130BP、6860±90BPである。以上の異なる年代の測定に基づけば、日本ではだいたい今から7000～6500年前の間に、最も古い玦状耳飾が既に出現していたのである。最近藤田富士夫氏が『環状型玦状耳飾に関する基礎的考察』のなかで、日本の最も早期の玦飾について精細に総合考察している。日本早期の玦飾についていえば、南部の鹿児島県梶ノ原遺跡から東北の岩手県米沢遺跡まで千キロ余りの範囲ですべて玦飾が出土する。

目下のところ、中国の東北地方は玦飾が最も早く出現した地域である。今から約8000年前に中国の東北地方で最初に玦飾のグループが出現した。7000～6000年前までの間に、長江の中、下流域及び日本の本州から九州までに広がる次の玦飾のグループ（図1）が形成された。

3、轆轤及び非轆轤系玦飾体系

東アジアの玦飾の研究では、藤田富士夫氏が玦飾の形態から提唱した玦飾の型式率の計算（注23）は、日本の玦飾の編年の研究に大変効果的であった。近年藤田は形態の差異に基づいて、玦飾をA～Dの4大別及び13形式に細別し、さらにこの分類方法に基づいて、日本と東アジア大陸の玦飾系統を相互比較するという効果的な試みを行った（注24）。

承知の通り、考古の遺物は、かたちが非常に似通っているものでも、全く異なった技術と伝統で製作されている可能性もある。故に、玦飾製作技術構造の比較研究は東アジアの玦飾の重要な課題の一つであろう。日本の玦飾工房の研究は豊かな資料が蓄積されている。この十数年来、筆者は環珠江口（注25）及びベトナム北部で環玦の工房（注26）を発掘研究し、初歩的な成果を得た。東アジア地域で既に知られている玦飾の製作技術体系のうち、筆者はひとまず二大体系（図3）として考えてみた。

その1、非轆轤玦飾体系(A)：玦飾生産過程において轆轤装置を備えていない。玦飾を素材から製品にするにあたり、普通単個体を生産し、基本的には管錐を用いた穿孔をしないので、轆轤玦飾体系には常に見られる穿孔芯はない。日本の縄文時代早期末葉から中期初期にいたるまでは非轆轤玦飾を代表する。中国大陸の東北地域、ロシア、朝鮮半島の玦飾工房はこれまで発見されていないので、これらの地域では玦飾体系は不明で、現状では日本の非轆轤玦飾体系と比較して判断することはできない。

その2、轆轤玦飾体系(B)：轆轤機械を用いて管錐で素材に孔を開ければ、この製作過程において同一素材で幾つもの環玦製品ができる。これまでに知られている轆轤体系の玦飾は、おそらく長江中、下流域で最も早く出現した。珠江からソンコイ河流域まで玦飾工房が発掘されており、轆轤玦飾体系の存在を実証している。東南アジアの大陸部からジャワ群島にかけてもおそらくこの体系の傍系に属する。現在フィリピンの状況ははっきりしていないが、少なくとも台湾の玦飾製作技術の伝統はこの体系の範囲に属する。このように長江の中、下流域から南下して東南アジアの大陸部まで、また島々ではジャワから遡って北上して台湾までは、おそらくみな轆轤玦飾体系の範囲に属する。以下に上述の両体系について簡略に検討する。玉器製作における轆轤装置の関連に關連し、寺村光晴先生の近年の研究に鋭い論述が発表されている。

寺村先生は玉工作機械に関し以下のように論述している。

玉作遺跡では京都弥栄町・奈良岡遺跡で出土した「穿孔用工具」……しかし、私は轆轤の「尖軸」の一部であろうと考えています。轆轤の縦軸上端の部分で凸型の先端が回転軸の下面中央の軸受けに噛み合います。……尖軸には、もちろん木製もあったでしょうが、これは腐ってしまい残っていません。……垂直に立てられた「縦軸」、つまり尖軸に、中央に凹みの軸受けのある円盤を装着します。回転は足（蹴轆轤）でなく、手で回してもよいわけです。円盤がブレないように固定したもので支え、または手で把握し、研磨剤と水を流し込みながら、円盤を回転させれば、穿孔ができます。逆に、錐を円盤に固定し、玉材を持ってもよいかと思えます。さらに、錐を絞り込むように、すなわち力を加えれば、よりスムーズに孔があいていくと思えます。尖軸と考えられる遺物の出土から、このような仕組み（工作機械）があったと思っています（注27）。

寺村先生の啓発のもと、最近私は『有史以前の玉器管鑽轆轤装置』の中で次のように指摘した。

1995年1月我々はマカオの黒沙遺跡の発掘で、第1層の砂質土の中から石英及び水晶の環玦の装飾品の工房跡を掘り出した。年代は今から約4000年前である。黒沙遺跡95Aグリッド第一生活面から赤く焼けた土と礫群の構築跡を発見した。この赤く焼けた土の周囲から環玦未製品及び芯の部分が出土した。観察では、環の内壁及び芯の外沿にはいずれも高速回転によってできた光沢と線状痕が残っていた。同様に赤く焼けた土の付近から楕円形の丸石が出土した。丸石の長軸の両端にはそれぞれ乳頭状

の突起があり、その周りにも明らかに高速回転で動かすことによってできた光沢と線状痕が見られる。環、芯及び上述の丸石の三者の出土位置はかなり近く、三者に同様に高速作動回転の摩擦の痕跡が残っており、相互の関係をどう解釈するかは大変興味深い。……(この種の石器は) おそらく轆轤装置の軸受けの部分であろうから、轆轤承軸器^{うけじくき}ということができ、軸と軸受けとで構成された動力装置であり、それによって重量を伝達し軸運動の部品を固定するものであり、軸の回転と揺動を支持し固定する機械の部品でもある(注28)。

黒沙遺跡で発見された承軸器とその軸の円い痕跡から考察して、堅軸轆轤の可能性が推察される(図2)。このような轆轤承軸器は、環珠江口の全ての環玦の工房で頻繁に出る。たとえば著名な珠海宝鏡湾遺跡でも轆轤承軸器が環玦の芯と共に出土する。また一方、私とベトナム考古学院の阮金容博士が共同発掘した長晴玉工房遺跡でも同様に轆轤承軸器と環玦が共存しているのが見つかったが、詳細な状況は筆者の別の近著を参考にされたい。東南アジア地域では、筆者はジャワ国立博物館の羊角化石で作られた轆轤承軸器を見た(注29)。また、台湾台東の卑南遺跡及び長光遺跡では、典型的な轆轤承軸器が出土している。私はかつて『東アジア有史以前の玉器管鑽技術試釈』において宜蘭県大竹遺跡で轆轤承軸器と環玦の装飾品が出土し、年代は今から4000～3000年前であろうということを挙げた(注30)。卑南遺跡出土の玉玦(注31)では同一の玉玦素材に何度も管鑽技術を用いて何点もの玦飾を作っていることがさらにはっきり分かる。これは典型的な轆轤玦飾体系である。

轆轤玦飾体系の起源に関しては、今のところ余り分かっていない。甘肅省大地湾遺跡と浙江省羅家角遺跡ではいずれも轆轤承軸器が出土しているが、玉器製作に用いられたかどうかは判断する術がない。近頃、浙江省文物考古研究所の蔣衛東先生のご教示によれば、馬家浜文化時代では、余杭県嶺山南椿橋遺跡で玦飾の素材と轆轤承軸器であろうと思われるものが発見された。2003年9月、蔣先生のご厚意により、筆者は南椿橋遺跡の轆轤承軸器を見学したことがあるが、その形と構造は筆者がマカオの黒沙遺跡で発掘した同類の石器とかなり一致していた。安徽省凌家灘遺跡でも今から5000年前の管鑽芯と轆轤承軸器が同一土壌の中に共存しているのが発見された。凌家灘及び湖南省城頭山遺跡 T5054の玦飾は、同一素材により管鑽を用いて何点もの玦飾を作り出す技術が既に完成しており、この体系の技術は珠江流域よりも1000年以上早かったことをはっきりと示している。

非轆轤玦飾体系は日本の縄文時代の玦飾がその代表である。日本の玦飾の加工技術の研究は成果累累である。藤田富士夫氏は『玦状耳飾』の中で日本の玦飾を第Ⅰ期から第Ⅲ期に分け、加工技術の面から各時期毎に分析検討している。その内の第Ⅰ期の縄文前期初頭は富山県の極楽寺玦飾工房遺跡に代表され、製作方法は、形を割り出す、形を整える、荒磨き、穿孔、切り目を入れる、孔の修正、成形研磨の7工程で、これが日本の玦飾製作体系の特色である。この種の一個の素材から一個の玦飾を生産する方法は、孔を開けるのは一般に「手抉法」であり、従って管鑽芯は存在しない(注32)。近年、日本で極楽寺遺跡よりさらに早い玦飾製作の遺跡が発見されており、技術面の研究の詳細な発表を期待し

ている。轆轤及び非轆轤瑛飾の2つの異なった体系では、両者の展開の時期は非轆轤瑛飾体系がやや早い(約7000年前)、その消滅も早い(約5000年前)。轆轤体系瑛飾の展開は約6000年前からで、4000年前後には相次いで東南アジア南部の大陸部及び島々へ徐々に拡散していった(図3)。

4、考察

東アジアの瑛飾に関する問題について、近年、藤田富士夫(注33)、中山清隆(注34)、川崎保(注35)などの日本の学者が多くの鋭い見解を發表している。これらの研究は一般に主として中日間の瑛飾の關係の検討であり、とりわけ日本の瑛飾の起源についての問題に集中している。筆者が東アジアの瑛飾の起源と拡散を考えると、瑛飾がいかにして東アジアの大陸及び島々に広がっていったかにまで及ぶ。考古学の資料で明らかのように、瑛飾には8000年間の發展過程があり、東アジアの大陸に絶えず浸透し続けた。その中で錯綜する複雑な文化において相互關係があったことは想像できる。この他、東アジアの異なった島においては、瑛飾の出現状況にも明らかに大きな差異が現れており、異なった島の瑛飾の出現と消滅の過程を比較することも、瑛飾がいかにして拡散していったかに関する重要な課題であろう。現今の東アジア各国社会の文化及び言語上の数多の障害により、瑛飾の歴史全体の深い比較研究は、まだこれからの研究に期待される。このような意味からいえば、1986年に今村啓爾氏が組織した環中国海瑛飾文化交流會議(注36)が、東アジア各地の瑛飾の編年と年代の確立、製作技術の分析、材質及び交易などの問題を提起し、さらには瑛飾の社会的意義及び民族学に関連した資料の開拓などの研究検討の方向も、現在の21世紀の瑛飾研究の努力すべき方向でもあると考えられる。

筆者は東アジアの瑛飾の問題について、浅薄ながら次のような見方をしている。確かに松藤和人氏の指摘のように、東アジアの旧石器時代後期の裝飾品の出現は北方文化の色彩を色濃く帯びていた。東アジアの旧石器時代後期には耳飾りはまだ見られない。瑛飾の文化はおそらく全新世初期に形成されたものであり、新石器時代早期になってやっと耳の裝飾品が出現する。ここでは先ず現今の中国大陸の新石器時代早期文化の発見から始め、南から北へ簡略に述べ、早期瑛飾が中国で出現する過程を検討したい。

先ず最初に、中国南部の珠江水系の広西省頂嶺山遺跡では10000～8000年前の文化堆積及び土壙から骨瑛飾のみが出土している(注37)。現在のところ嶺南地域新石器時代の早期は玉器文化とは無縁であるといえよう。

長江中、下流域では、湖南省彭頭山文化及び浙江省蕭山跨湖橋から新石器文化早期の玉石の裝飾品が見つかっている。彭頭山文化の年代は今から8000～7000年前の段階である。彭頭山遺跡出土の玉石裝飾品は、孔の穿ってある棒状の瑛飾と管玉の2種類である。その内の彭頭山遺跡M37の人骨の左側に5個の磨製管玉が置かれていた。棒状瑛飾はより細かく分類すれば細長い形のものと同様に細長い形のものがあり、図1の10のやや長い1点は長さ8.5cm、底の幅1.1cm、厚さ0.7cmで、いずれも全体が磨かれている。管玉は佩飾りで、

正円形とはいえないが、長さは1.9 cm、直径は0.9 cmである（注38）。裴安平は彭頭山文化ではかなり穿孔棒状墜飾が流行しており、一般に陶質あるいは黒色のオイル・シェール／油母頁岩を磨き上げたもので、全体にしっとり滑らかであると指摘している（注39）。

彭頭山文化の人体装飾品が長江流域でその後どう発展していったかは定かではない。湖南省では大溪文化に入ってから、璜、玦飾などが相次いで大量に出現したが、明らかに前者とは違った玉器系統に属している。しかし、彭頭山の玉石装飾品の出現に含まれる意味については、少なくとも以下の2点を理解しなければならない。

1. 彭頭山の管玉は8000年前には既に長江流域に出現していた。筆者がかつて論述したように、新石器時代の8000～7000年の間においては、黄河（老官台）、淮河（賈湖）、長江（彭頭山）で玉石で作られた管玉が発見されている。東アジア北部では旧石器時代後期の管玉はいくつか発見されている。故に、管玉と玦飾の伝播は必ずしも同時進行ではないと思う。日本列島では、川崎保氏が指摘するように玦飾と管玉などは常に共存している（注40）。中国及び日本の早期における玦飾と管玉の組み合わせは一致しているところも異なっているところもある。

2. 今のところ、彭頭山の棒状墜飾の湖南省新石器文化における意義はまだ明らかではないが、この種の棒状墜飾を東アジアの早期玉石装飾品の中に置いて考察すれば、その重要な意義が現れてこよう。棒状墜飾の実際的用途について、発見者はあまり多くの論述はしていないが、おそらく一方の端に孔が穿たれているので、棒状墜飾と命名されたのであろう。

藤田富士夫氏がかつて篋状垂飾と棒状垂飾を検討したが、桑野遺跡の篋状垂飾と倉輪遺跡の棒状垂飾は同じ使い方であり、髪飾りなどの類であろうという見解を示している（注41）。川崎保氏は篋状垂飾をそれぞれに平坦型篋状垂飾と弯曲型篋状垂飾と名付けている（注42）。日本でいうところの弯曲型の篋状垂飾は、中国では、東北地方の興隆窪文化によく見られる匕形器の形と一致する。彭頭山棒状墜飾断面は幅広の扁平な形を呈し、平坦型篋状垂飾の形に近い。中国では、匕形器と棒状垂飾の機能は、目下の所まだはっきりした見解に至っていない。棒状墜飾は江蘇省の丁沙地、黒竜江省の小南山、ロシアのChetovy Vorota、朝鮮半島の厚浦里、日本の東京都倉輪などの遺跡で発見されているが、その内の一部の遺跡では棒状墜飾と管玉が共存している。現在の中国での発見からいえば、匕形器と棒状垂飾の両者は地域分布においては継承関係はないと見られる。

¹⁴Cによる年代測定でいえば、浙江省蕭山跨湖橋遺跡は河姆渡遺跡第四層及び羅家角遺跡より早く、8000～7000年の間である。跨湖橋遺跡で発掘された330 m²の範囲内では、璜の装飾品が見つかるだけであり、既に発表されている2点の一つは条形で、もう一つは璜型管であり、玦飾は見つからない（注43）。湖南地域の大溪文化一期につなげて考えると丁家崗遺跡 M26 から2点の璜が出土しているだけで、玦飾は見つからない。これは長江中、下流域での璜と玦の出現にはおそらく早い遅いの関係があるということであろうが、一歩進んだ確認が待たれる。

河姆渡遺跡第四層の玉器の組み合わせは東北の興隆窪文化と密接な関係があることをは

っきり示していると思う。筆者は中国の東北地方と長江デルタ地帯2地域での早期玦飾の相互関係は¹⁴Cによる年代の後先で検討できるとのみ思っているわけではない。玉器の種類、組み合わせ及び製作技術のいくつかの方面から、私はかつて河姆渡遺跡第四層から出た玦飾は、おそらく東北からの影響を受けて生まれたものだと論断した(注44)。

第1:玉器の器型からいえば、河姆渡遺跡出土の玉珠、管玉、玦飾、弯条形器の四者は、いずれも東北の興隆窪文化と共通の玉器の装飾品である。両地域に4種以上のセットの玉器が類似しているのは決して偶然ではあるまい。

第2、長江流域では河姆渡文化以来、玉器の素材の切截や切断に比較的顕著に糸による切断法が用いられている。河姆渡遺跡の玦飾の切り目は主に糸により切り込まれていることを筆者自身の目で確認した。良渚遺跡の玉器の糸切技術は非常に発達している。東北地域の紅山牛河梁第三地点7号墓出土の玉箍形器にはまだはっきりと糸切の痕跡が残っている(注45)。この他、小南山の玉材にはすでに糸切で切り目を入れた痕跡が見つかっていると報告されている。興隆窪文化出土の玦飾も糸切で切り目を入れてある。東アジアでは有史以前の時代の玉材の糸切技術はかなり特色のある加工技術であると考えられる。筆者のこれまでの観察によれば、東アジアの大陸の玉器製造技術の系統の内、北シベリヤのGlazkovskaya文化は鋸で材料を切断している。中国東北及び長江の玉器には糸と鋸の2種類の切断があり、糸による切断が特色である。東アジア南部の珠江水系及びベトナムのソンコイ河流域の玉石の切截は鋸による切断のみである。台湾の平林玉作工房もまた鋸切截のみである。私は、東北と長江の玉材切り出し及び切り目切断において同じような糸切技術が表れているので、明らかに両地域の玉器の技術には密接な交流関係があると思っている。

興隆窪文化南限は燕山南麓までも覆っている。山東省後李遺跡出土のやや大きい口斜原平底形罐はおそらく興隆窪文化の影響を受けているのであろう(注46)。玦飾は東北から燕山を越えて南下して長江下流に至ったが、越すことのできないかなる障壁もなかっただろう。河姆渡遺跡の玦飾の出現は、おそらく東北玉器の影響が南下した具体的表れである。

今日知られている黄河流域は玦飾の起源としての条件を備えているわけではないと考えられる。甘肅省安大地湾遺跡出土の仰韶文化の最も早い玉器には、斧、鏃、鏃、筭、錫、杖端飾、斧形佩などがあり、年代は今から6700年前である(注47)。しかし、新石器時代の黄河流域では玦飾はずっと流行しなかった。これは仰韶文化と龍山文化がここでは勢力の強い文化要素だったことと関係があると思われるが、このことについては、さらに一層の研究が待たれる。

ロシア沿海州のChertovy Vorota 洞穴より出土した玉器の年代と組み合わせは一步進んだ確認が待たれる。しかし、Chertovy Vorota 出土の玦、匕形器、棒状垂飾、弯条形器、管玉、珠などの玉器はみな興隆窪文化によく見られるものである。Chertovy Vorota の切り目は糸を用いた切断なのかどうか、筆者は浅学にて、未だ実物を見ていない。

河姆渡から黒竜江にかけて出土する玦飾の切り目の多くは糸切技術によって開けられて

いる。筆者が紙面で見た Chertovy Vorota の 1 点璧形飾の一面に糸切の波状起伏の円弧線状痕跡が残っているようであるが、それは糸切技術により残された痕跡であろう、今後の確認が待たれる。彎条形器の面では、Chertovy Vorota、興隆窪及び河姆渡にはみな同様の玉飾がある。珠江口地域の今から 4500 年前の宝鏡湾遺跡でもいくつかの彎条形器が発見されている（注 48）。

日本の玦飾の出現年代は早く、今から約 7000 ～ 6000 年前の間に、本州及び九州各地で玦飾が出土している。これまでのところ最も早い玦飾の渡来品は発見されておらず、目下日本で発見された早期の玦飾はおそらくみな当地で製作されたものである（注 49）。日本の玦飾の起源に関して、藤田富士夫氏、川崎保氏などは日本と中国東北の玦飾の相互関係を強調している。川崎保氏はかつて玦飾と関連して組み合わせる人体の装飾品は中国東北に起こり、黒竜江及び沿海州を経て日本列島に伝わってきたと明確に指摘した（注 50）。木下哲夫氏はまた桑野遺跡出土の玦飾及び匕形器は東アジアとの交流の結果であるとしている（注 51）。日本の玦飾を考えると、筆者は以下のようないくつかの意見を持っている。

1. 玉器製作技術の上からいえば、興隆窪、小南山から河姆渡、良渚に到るまで、玉玦の切り目は主に糸切で切り込んであり、糸切技術は素材分割などの工程において重要な役割を持っていると思われる。日本における早期の玉玦の切り目切断技術は、糸切技術ではなく石鋸あるいは剥片を用いていると指摘されている。両地域の間になぜこのような差異が表れたのであろうか？最近日本の石川県三引遺跡縄文早期末葉～前期初頭の玦飾製作の素材及び製品などについて、筆者はさらなる関連資料の発表を期待している。
2. 早期の玦飾の多くはやや軟質の蛇紋岩、滑石、蠟石などの石材を用いている。従って、玦飾製作は手を使った「手抉法」で孔を開けている。中国東北の興隆窪及び小南山の玦はみな軟玉製で硬質なので、手のみによる「手抉法」で孔を開けるのは難しい。藤田富士夫氏が近年やはり河姆渡遺跡第四層出土の玦飾がおそらく日本の玦飾の起源と関係があるだろうと主張し続け、これにより「南北二系統論」を提唱している。河姆渡遺跡第四層出土の蛍石の玦飾の材料は、具体的な製作方法は日本の早期の玦飾と同じであるかどうか、確認が待たれる。しかし、玦飾の材料からいえば、河姆渡遺跡第四層と日本の早期の玦飾の質は最も近い。
3. 東アジアの列島の玦飾の歴史を考察すると、日本列島と台湾はそれぞれ非轆轤玦飾と轆轤玦飾体系の代表である。

日本の玦飾は 1 個の素材で 1 個の玦飾をつくり、手のみの「手抉法」で孔を開けるので、轆轤機械を使用した管鑽穿孔は見られない。東アジアの大陸部では、中国華北及び東北地方に到るまで玦飾工房遺跡は発見されておらず、非轆轤玦飾体系を東アジアの大陸部で探究することは、日本の玦飾の源の問題に重要な手がかりを提供することになろう。近年では桑野遺跡、三引遺跡出土の玦飾、匕形器は管玉などと共存している。一般に日本の早期の玦飾は中国東北部と比較的密接な関係があると推測されている。両地域間の具体的な経路は、ロシア及び朝鮮半島のさらに多くの資料の発見を待たなければならない。この

他、木下哲夫氏は日本の玦飾は相当長期にわたって波状によそからやってきたものの影響を受けて形成されたという。筆者は逆におそらく相対的に比較的短い期間であり、玦飾の伝統が日本列島に入って受け入れられた後、独自の発展の道を辿ったと考える。後続する長江流域の今から 6000 年前の轆轤玦飾体系は日本には入ってこなかった。日本の玦飾は発展して特有な特色ある玦飾を作り上げ、その代表として樋口清之氏の主張する A、D、E、F 類の玦飾が挙げられ、うち E 類の三角形玦飾は日本全国に分布している。

日本と珠江デルタの玦飾を比べると、同じように外来の刺激によって出現している。珠江デルタの玦飾の歴史は概ね今から 4500～2500 年の間で普及していた（注 52）。筆者は詳細に珠江デルタの玦飾の歴史と比べてみたが、第一段階 4500～4000BP、第二段階 3500～3000BP、第三段階 3000～2500BP の各段階の玦飾に区分でき、すべて明らかに嶺南以北の玦飾が伝わってきた影響を受けて出現したものである。それぞれの段階の玦飾は直接連続した発展関係にあるわけではなく、その間には若干の断絶があり、明らかに長期にわたる途絶えたり続いたりする伝播方式であった。以上、日本と珠江デルタは玦飾の継承方式に置いて明らかな差異がある。

一方、台湾の玦飾はおおよそ今から 3500～2500 年前の間にかかなり繁栄した。日本と比べれば、台湾の玦飾の出現年代はやや遅く、継続した歴史的期間も割に短い。台湾は東アジアの島々の轆轤玦飾体系の北限である。これまで沖縄一帯にはまだ玦飾は見られない。いまから 1500 年前に台湾にも銀製とガラス製の玦飾（注 53）が現れたが、これはその伝統の玦飾そのものが発展したものであるというわけではない。長江、珠江、ソンコイ河より発達した轆轤玦飾体系を考察すると、台湾の玦飾はおそらくベトナムからフィリピンを経由して、黒潮に乗って伝わったものであると考えられる。

東アジアの玦飾の歴史は、一つの盤の将棋のように、必ず盤全体を考えなければならない。玦飾が象徴的意義を持つ「第二の道具」であるという角度から考えれば、東アジアの人類の全新世時代に最も広く分布した精神文明の要素を代表しており、今後の国際的協力による研究が始まるのが待たれる（注 54）。

【日本語訳：谷内美江子】

謝辞

拙稿執筆にあたり、ロシアの Komissarov, Sergei A. 博士、ベトナムの Nguyen KimDung 博士、台湾の洪曉純女史にそれぞれの地の玦飾の資料をご提供いただき、感激の極みであります。須藤隆教授、阿子島香教授、柳田俊雄教授には東北大学考古学研究所の蔵書利用の便宜を賜り、感謝に堪えません。

また特に藤田富士夫先生には糸魚川各地の玉作工房の資料のご教示、富山県極楽寺遺跡及び出土文物の参観、貴重な文献資料の恵贈を賜りました。先生の学恩に謹んで拙文を以て応えるものです。拙稿の附図製作は黄韻璋さんに、芳潔靈さん、盧智基君には清書校正をしていただきました。併せてお礼申し上げます。

【注釈】

- 注1) 鄧聰：〈東亞玦飾四題〉，《文物》2000年第2期，頁35—45。
- 注2) 楊虎、劉國祥：〈興隆窪文化玉器初論〉，《東亞玉器》（第一冊）（香港：香港中文大學中國考古藝術研究中心，1998年），頁128—139。
- 注3) 中國社會科學院考古研究所內蒙古工作隊：〈內蒙古敖漢旗興隆窪遺址發掘簡報〉，《考古》1985年第10期，頁865—874。
- 注4) 內蒙古文物考古研究所：〈內蒙古林西縣白音長汗新石器時代遺址發掘簡報〉，《考古》1993年第7期，頁577—586。
- 注5) 朝格巴圖：〈內蒙古巴林右旗錫本包楞出土玉器〉，《考古》1996年第2期，頁88。
- 注6) 遼寧省文物考古研究所：〈遼寧阜新縣查海遺址1987—1990年三次發掘〉，《文物》1994年第11期，頁4—19。
- 注7) a. 劉國祥：〈論遼河流域玉文化的起源與發展〉，《國立國父紀念館館刊》第9期（2002年），頁125—141。
b. 劉國祥：〈興隆溝聚落遺址：8000年前精美玉器，5000年前裸女陶塑〉，《文物天地》2002年第1期，頁1—2。
- 注8) a. 劉國祥：〈黑龍江史前玉器研究〉，《中國歷史博物館館刊》2000年第1期，頁72—86、96
b. 劉國祥：〈黑龍江饒河小南山遺存的文化性質與年代探討〉，《中國文物報》1999年3月24日。
- 注9) 李英魁、高波：〈黑龍江饒河縣小南山新石器時代墓葬〉，《考古》1996年第2期，頁1—8。
- 注10) 大貫靜夫：「朝鮮半島，沿海州，サハリンの土器出現期の様相」，『環日本海地域の土器出現期の様相』（東京：雄山閣，1994年），頁45—57。
- 注11) 川崎保：「東アジアの中で見た玦状耳飾の起源と展開」，『長野縣の考古學』（II）（長野：長野縣埋藏文化財センター，2002年），頁1—20。
- 注12) Kuznetsov, Anatoly Mikha'lovich 著，大貫靜夫訳：「チョルトヴィ，ヴァロタ洞窟遺跡と沿海州新石器時代における諸問題」，『博望』第3號（2002年），頁21—37。
- 注13) 浙江省文物考古研究所：《河姆渡——新石器時代遺址考古發掘報告》（北京：文物出版社，2003年）。
- 注14) 同 注13)，頁78。
- 注15) 安徽省文物考古研究所編：《凌家灘玉器》（北京：文物出版社，2000年），頁84。
- 注16) 浙江省文物考古研究所編：《浙江考古精華》（北京：文物出版社，1999年），頁50。
- 注17) 蔣樂平：〈象山縣塔山遺址第一、二期發掘〉，《浙江省文物考古研究所學刊》（北京：長征出版社，1997年），頁22—73。
- 注18) 魏正瑾：〈馬家浜文化玉質裝飾品考察〉，《農業考古》1999年第3期，頁57—61。
- 注19) 杭濤、陸建芳、唐漢章：〈江陰祁頭山遺址考古獲新突破〉，《中國文物報》2001年2月28日。
- 注20) 吳榮清：〈江蘇句容丁沙地遺址試掘鑽探簡報〉，《東南文化》1990年第1、2期，頁241—254。
- 注21) 賈慶元：〈宿松黃鱗嘴新石器時代遺址〉，《考古學報》1987年第4期，頁451—469。
- 注22) 何介鈞：〈湖南史前玉器〉，《東亞玉器》（第一冊），頁222—227。
- 注23) 藤田富士夫：「玉」（東京：ニューサイエンス社，1989年），頁30—36。
- 注24) 藤田富士夫：「日本海をめぐる玉文化交流」，『日本海學の新世紀』（富山：角川書店，2001年），頁131。
- 注25) a. 鄧聰、鄭煒明：《澳門黑沙》（香港：香港中文大學，1996年）
b. 鄧聰：〈環珠江口考古之崛起——玉石飾物作坊研究舉隅〉，《珠海文物集萃》（香港：香港中文大學中國考古藝術研究中心，2000年），頁12—60。
- 注26) Nguyen Kim Dung, Bui Thu Phuong and Tang Chung, "Khai Quat Di Chi Trang Kenh Hai

- Phong (12-1996)*, Nhung phat hien moi ve khao co hoc nam 1997 (Ha Noi: Nha Xuat Ban Khoa Hoc Xa Hoi, 1998), pp. 243 — 245.
- 注 27) 寺村光晴:「玉作とその流通」,『ものづくりの考古学』(東京:東京美術, 2001年), 頁 216。
- 注 28) 鄧聰:〈史前玉器管鑽機軸機械的探討〉,《中國社會科學院古代文明研究中心通訊》第 3 期 (2002 年), 頁 49 — 51。
- 注 29) Christopher J. Frappe (ed.), Burnished Beauty: The Art of Stone in Early Southeast Asia (Bangkok: Orchid Press, 2000), p. 117, pl. 125.
- 注 30) 鄧聰:〈東亞史前玉器管鑽技術試釋〉,《史前琢玉工藝技術》(台北:國立台灣博物館, 2003 年), 頁 145 — 156。
- 注 31) 連照美:〈台灣卑南玉器研究〉,《東亞玉器》(第一冊), 頁 350 — 367。
- 注 32) 藤田富士夫:「玦狀耳飾」,『縄文文化の研究』(第 7 卷)(東京:雄山閣, 1983 年), 頁 249 — 262。
- 注 33) 藤田富士夫:〈日本列島の玦狀耳飾の始源に関する試論〉,《東亞玉器》(第二冊), 頁 312 — 321。
- 注 34) 中山清隆:「縄文文化と大陸系文物」,『縄文時代の渡來文化』(東京:雄山閣, 2002 年), 頁 214 — 233。
- 注 35) 川崎保:「日本海をめぐる二つの遺跡から見た玦狀耳飾と裝身具」,『考古学に学ぶ——遺構と遺物』(京都:同志社大學考古学シリーズ刊行會, 1999 年), 頁 55 — 64。
- 注 36) 今村啟爾:「まとめと今後の問題点」,「第 10 回大會發表要旨——シンポジウム:環シナ海地域の文化交流—玦狀耳飾を中心にして」,『東南考古学会會報』第 7 號 (1987 年), 頁 18 — 19。
- 注 37) 傅憲國、李新偉:〈廣西邕寧縣頂嶺山遺址的發掘〉,《考古》1998 年第 11 期, 頁 11 — 33。
- 注 38) 裴安平、曹傳松:〈湖南澧縣彭頭山新石器時代早期遺址發掘簡報〉,《文物》1990 年第 8 期, 頁 27 — 28。
- 注 39) 裴安平:〈彭頭山文化初論〉,《長江中游史前文化暨第二屆亞洲文明學術討論會論文集》(長沙:岳麓書社, 1996 年), 頁 81 — 104。
- 注 40) 川崎保:「玦狀耳飾と管玉の出現」,『考古学雑誌』第 83 卷 3 號 (1998 年), 頁 1 — 29。
- 注 41) 藤田富士夫:「ヘラ狀垂飾についての一考察」,『畫龍天晴——山内清男先生沒後 25 年記念論集』(福島:山内先生沒後 25 年記念論集刊行會, 1996 年), 頁 173 — 180。
- 注 42) 同注 11, 頁 16。
- 注 43) 方向明、芮國耀:〈蕭山跨湖橋新石器時代文化遺址〉,《浙江省文物考古研究所學刊》, 頁 6 — 21。
- 注 44) 同注 1)。
- 注 45) 孫守道、郭大順:《中國考古文物之美 1: 遼寧紅山文化壇廟塚》(北京:文物出版社, 1994 年)
- 注 46) 樂豐實:《海岱地區考古研究》(濟南:山東大學出版社, 1997 年)
- 注 47) 謝瑞琚:〈黃河上游史前文化玉器研究〉,《故宮學術季刊》第 19 卷 2 期, 頁 1 — 34。
- 注 48) 李世源、鄧聰編:《珠海文物集萃》, 頁 195。
- 注 49) 藤田富士夫:「環狀型玦狀耳飾に関する基礎的考察」,『新世紀の考古学:大塚初重先生喜壽記念論文集』(いわき:纂修堂, 2003 年), 頁 39 — 48。
- 注 50) 同注 11)。
- 注 51) 木下哲夫:「福井縣桑野遺跡の石製裝身具」,『縄文時代の渡來文化』, 頁 144 — 163。
- 注 52) 鄧聰:〈環狀玦飾研究舉隅〉,《東亞玉器》(第一冊), 頁 86 — 99。
- 注 53) 臧振華:《台北縣八里鄉十三行遺址文物陳列館規劃報告》(台北:中央研究院歷史語言研究所, 1995 年), 圖版 26、30。
- 注 54) 鄧聰:〈從世界史看東亞玦飾〉,「新世紀的考古学——文化、區位、生態多元互動」學術研討會, 2003 年

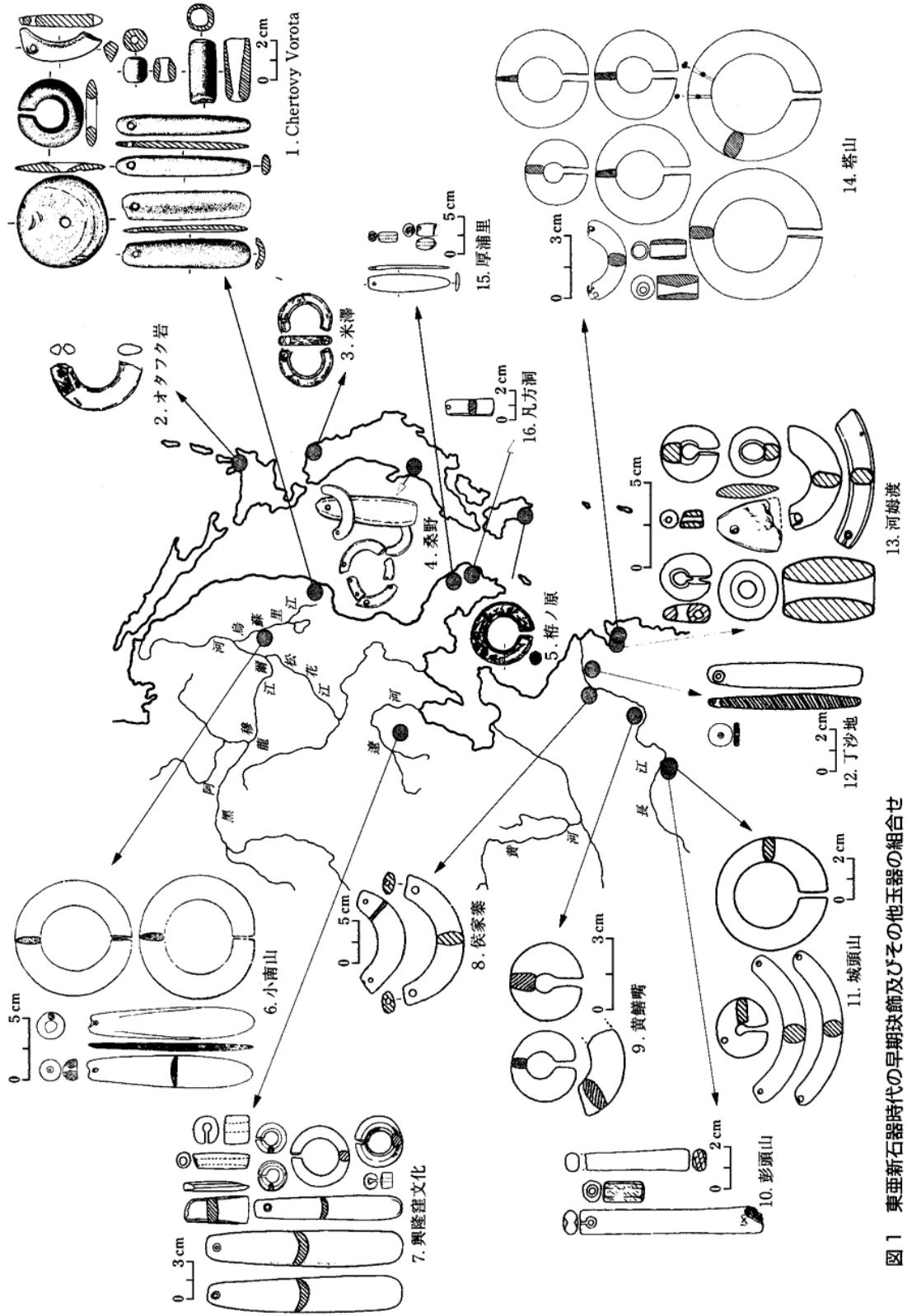


図1 東亜新石器時代の早期球飾及びその他玉器の組合せ

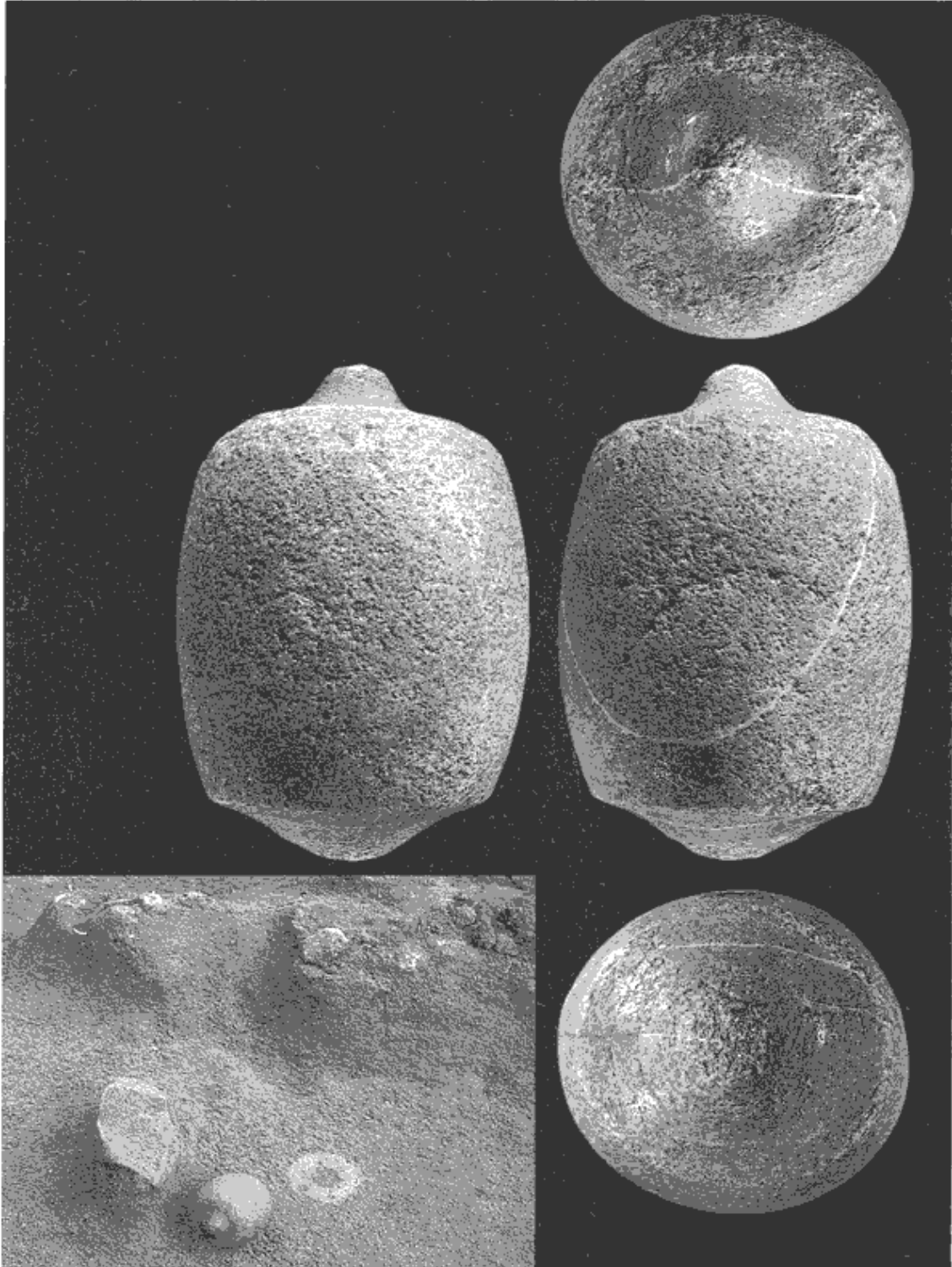


図2 マカオ黒沙遺跡で発見された承軸器(実大7.8cm×4.5cm)
および軸の円い痕跡の出土状態

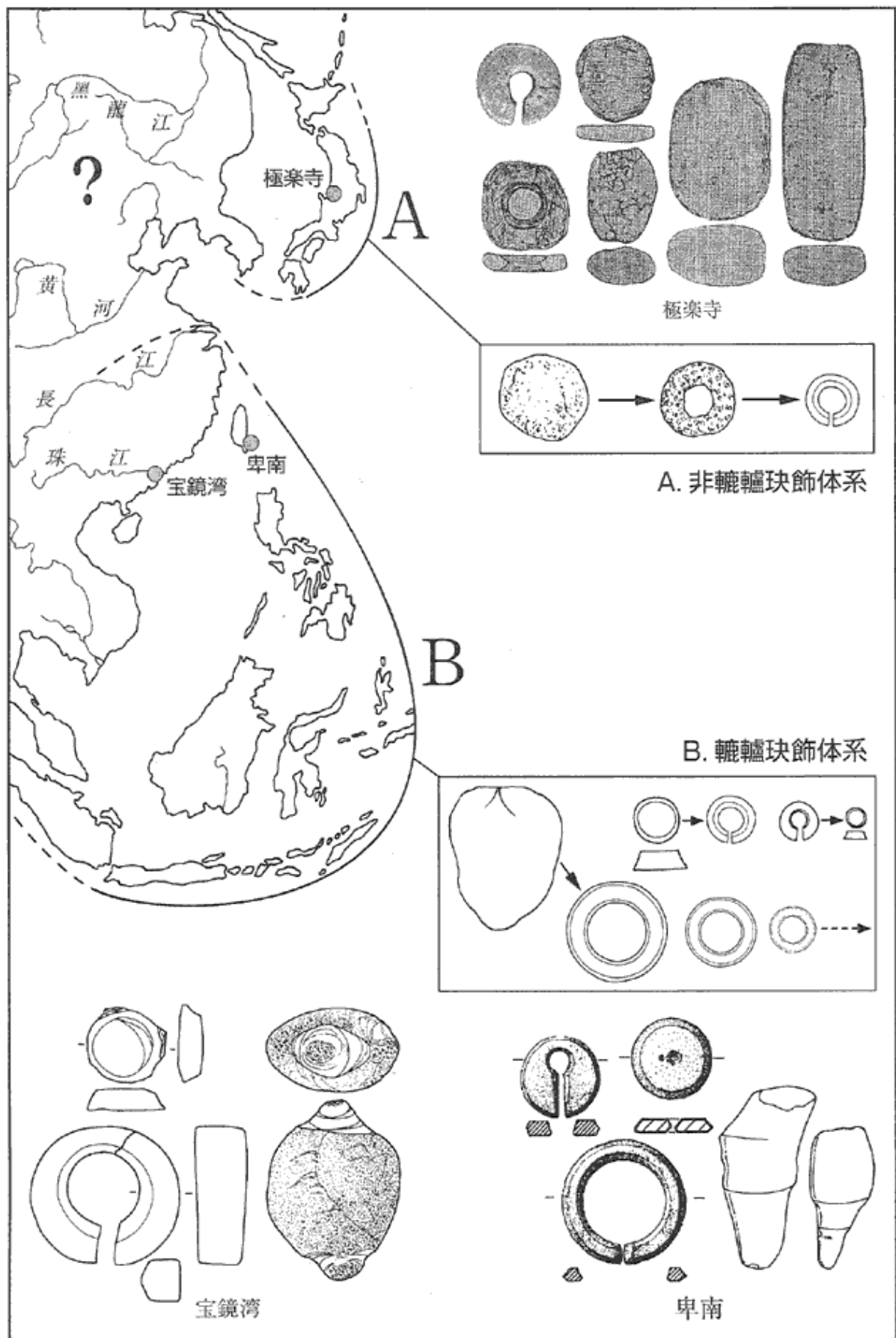


図3 東亜玦飾の二大体系